

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第2章「1号機爆発」

福島第一原発2号機の低圧系配電

盤に電源車をつなぐ作業は大詰めを

迎えていた。復旧班で電気設備を担

当する松本光弘(竹)は、同じ担当の

池田公男(50)らと電源復旧方法の検

討を重ね、3月12朝から重い電源

ケーブルを担いで敷設作業を続けて

きた。

検討の結果、電源車は2号機各1

基の建屋の脇に止め、建屋の壁の小

さな貫通口からケーブルを出すのが

最短距離だと判断した。午前6時か

ら約9時間を要した敷設作業が完了

し、ついに電源車からの送電が可能

となった。

津波で全電源を喪失してほば丸1

電源復旧振り出しに

12



空から降る黄色い塊

日、ようやく電源が復旧する。これ

はいニュースだ。報告のため免震

重要棟に向かう業務車の中で松本の

心は躍った。免震棟前の駐車場で車

から降りようとした瞬間だった。

「ポツ」

午後3時36分、大きな乾いた音だ

った。1号機原子炉建屋が爆発した。

音の印象は、聞いた者がいた場所

によって異なる。屋外にいた作業員

は皆、「軽い音だった」と証言して

いる。

粉ひんで周囲の景色が茶色かっ

福島第一原発1号機の水素爆発
2011年3月12日
(福島中央テレビ提供)

た。トクのようなものやホルトが

いて行くと、汚染検査を待つ作業員

降ってきた。黄色い綿のようなもの

の長い列ができていた。ガラスのド

も、ふわふわと舞っていた。松本が

アの向こうに、泣きだしたような顔の

乗る車のボンネットにも黄色い塊が

池田が見えた。松本を現場に出した

いくつも落ちてきた。建屋の壁に使

のは池田だ。「悪かった。すまなか

った」。池田はしきりに謝っていた。

ケーブル敷設作業のメンバーにはか

はなかつた。池田が言う。

「建屋が爆発するとは思っていな

かったので、無事に帰ってきてくれ

ただけで十分でした。でも2階の緊

急時対策本部に上ると「電源はど

作業員たちがバニクに陥ってい

た。鍵の開いている車を見つけては、

ぎゅっぎゅっ詰めになるまで何人も

沈んだの覚えています」

松本たちが苦労してつないだ電源

ケーブルは、爆発で飛んできたがれ

るようになるまで十数分、駐車場に

きて傷つき、使いたくならなくな

っていた。電源復旧作業は振り出し

に戻ってしまった。(敬称略。年齢

肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)